慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シードマン他著 労働者の組合観
Sub Title	Joel Seidman, Jack London, Bernard Karsh, Daisy L. Tagliacozzo "The workers views his union"
Author	二瓶, 恭光
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.10 (1965. 10) ,p.1092(160)- 1096(164)
JaLC DOI	10.14991/001.19651001-0160
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19651001-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

シードマン他著
『労働者の組合観』

Joel Seidman, Jack London, Bernard Karsh, Daisy L. Tagliacozzo "The Workers Views His Union" (The University of Chicago Press, 1958) (pp. 300)

一瓶恭光

1

本書はシカゴ大学で "Seidman group" として知られる著者達が、約一〇年間にわたって行った組合員としてのアメリカ労働者の研究の結果を最終的にまとめたものである。この研究が始められた当時、労働問題又は労使関係の研究者達は、労働者の労働組合に対する態度に関して、〝洞察力とカン〟に多く頼らざるを得ない状態にあった。勿論、労働組合の機能と構造、団体交渉および労働組合の最高指導者達の活動に関する書物は数多く存在した。しかし組合の下層を構成する人々に関する研究は殆んど見られなかったのである。本書の著者達が指摘するように、〝全国組合指導者達から専従のローカル幹部、そして各事業所における非専従のローカル指導者達に目を転じていくと、映像は次第にぼやけたものとなっていく。

そして一般組合員に至っては、彼等は漠然とした大衆にしか過ぎず、彼等に関する体系的かつ信頼し得る知識は殆んど存在しない。〟

しかしこの事実は、かかる一般労働者に対する理解の重要性を否定するものではない。彼等を個人としてみた時、その存在は小さなものである。しかしその個人個人が社会を形成する基盤であり、その個人を理解することなしに社会を理解することは出来ない。そして〝労働組合を構成する幾百万の人々に関して更に理解しなければ労働組合を理解することは出来ない。（そして）各個人を取り出し、彼が如何なる人間であるか、又彼が彼の組合をどう見ているかを知らなければ、この名もなき大衆を理解することは出来ないであろう。〟という著者達の主張は、彼等の問題意識の鋭さと学問に対する誠実さを示すものである。

2

本研究はアメリカ中西部で活動する六つのローカル組合（炭鉱労組、鉛管工組合、鉄鋼労組、金属労組、電話労組及び編物労組）における組合役員および一般組合員数百名に対する面接調査を通じて行なわれた。この面接調査は六〇項目から八五項目におよぶ質問表（主として open-end questions）によるものであり、その目的とするところは現在のアメリカ労働組合の〝存在と機能をより深くする為に労働組合員としてのアメリカ労働者に関して知らなければならない重要なこと〟を体系的かつ客観的に摘出することにあった。

調査対象とすべきローカル組合の抽出は、たとえ規模は大きくとも粗雑な調査をするよりは、比較的数少ない調査対象においてきめの細かい研究をする方が、より得るところが多いという著者達の判断に基いて、上述の六組合が選ばれたのであるが、この場合、地理的及び資金的条件が調査対象をシカゴ周辺にあるものに限定せしめた。個別のローカル組合の選定に当っては、その各々が出来るだけ異なった諸条件のもとにあることが考慮され、その異なった諸条件の組合員に与える影響を析出する努力がなされた。かくして選定されたローカル組合における面接調査においては、単に取り上げられた主題に関する労働者の明確な意見を知るばかりでなく、その主題に対する彼等の関与の度合、および組合運動に対する彼等の評価に影響を与える感情が追求された。

かかる研究の方法が著者達の持つ課題の解明に最も有効なものであり、しかもともすれば主観的な取り扱いにおちいりやすい問題に対して、研究方法の科学性を維持することにより客観的な接近——例えそれがいかに労力・資金・時間を必要とするものであり、その結果が一見地味なものであったとしても——を試みた努力は敬服すべきものである。

他方、この研究方法の使用が全体の研究結果の持つ意味にある程度の制約を課したことも否定出来ない。すなわち著者達の行い得た面接調査は、八万から一〇万のローカル組合に組織された一、六〇〇万～一、七〇〇万人の労働者のうち、六つのローカル組合に所属する数百人のものにしか過ぎない。しかも面接において用いられた質問表は、ローカル組合のあらゆる側面をその背景として取り上げ、その各面に同等の比重をもって光を当てたものとは云い難い。かかる方法論上の制約は本書における分析結果の一般的妥当性を限定するものである。著者達自身も認めるように、この研究を通じて著者達が提示し得たものは最終的結論ではなく、仮説的な組合員としての労働者像なのである。

3

本書の内容は二つの部分に分けることが出来る。第一の部分は調査対象の各組合における労働者を産業別に取り上げ、その各々について労働組合を与えられた一定の条件とした場合のこれに対する各労働者（組合員）の見方を、個人的およびその産業に特殊の諸条件との関連において分析しようとしている。例えば最初に取り上げられる炭鉱労働者の場合、他の産業に比べて非常に大きな意味をもつ自然的条件およびそれに規定される社会的条件、これ等諸条件の中で育ぐくまれた強い共同社会意識、更には現在では炭鉱における産業的な伝統の一部となっている労働組合の存在、その組織的特質およびその主要な活動、等々に関する一般組合員——組合活動に対して積極的な者も消極的な者も含めて——の意識および態度を明らかにすることにより、炭鉱労働者の労働組合員としての人間像を画き出している。第三の事例として取り上げられる鉄鋼労働者の場合には、生活環境、企業における労使関係および組合運動の歴史等を背景的事実として、そこに働く労働者の社会学的特質、仕事に対する態度、組合に期待するものおよび過去の業績に対する評価、組合に

加入した動機、組合活動に対する関与の度合、人生の将来に対する期待等について追跡がなされている。

この部分で著者達の目指しているのは、あくまで労働組合員としての労働者の人間像であるが、同時に各産業における組合運動の特質、すなわち石炭産業における伝統としての組合運動、鉄鋼産業における戦闘的な組合運動、派閥の存在と紛争を特徴とする金属産業の組合運動、創設以来未だ日が浅く、組織当時の激しい労使間の抗争の記憶も新しい編物工場の組合運動、ホワイト・カラーの集団としての電話事業における組合運動の人間的側面を探求することにより、これ等の組合運動としての特質が決して外的な条件のみによって抽象的に規定されたものではなく、その産業に働く様々な特徴と価値観をもった労働者の集団として内的・具体的に可能性を与えられていることを証明している。

以上の各組合の個別的な分析においては、労働組合員の労働者としての人間像の析出が中心であったが、本書の後半においては六つのローカル組合を横断的に取り上げ、把握された労働者の労働組合員としての人間像が追究され、更にかかる組合員によって規定されたローカル組合の活動範囲、および全体の分析を通じて結論される労働組合運動の問題点と組合への政策的な提言が示されている。

ローカル組合における組合員は、二つの群、すなわち、ローカル組合の役員と一般組合員とに分けられる。まずローカル組合の役員について著者達は、彼等こそ労働運動のバック・ボーンであり、一般社会の目には殆んど触れない彼等の膨大な日常活動が職場における一般組合員にとって直接的な重要性をもつものであるとしている。各ローカル組合役員は、年齢・教育水準・熟練度・個性・職務上の地位・組合役員としての権限等において相互に異ったものとして分析されているが、特に役員と一般組合員との相違については、人間的背景・経験・動機・個性等に関する幾つかの要素が、何故彼等が役員となったかに影響あるものとして取り上げられている。そしてこれ等の違いは、役員となった後の経験によって更に拡大される。

一般組合員の組合活動への関与の度合は、それが組合民主主義(union democracy)という組合の存立基盤の一つとの関連において重要である。すなわち民主的な価値観に基づく社会において労働組合が民主的であることは、それが組合員からも一般社会からも支持されることの必要条件である。勿論、組合民主主義という言葉が具体的に何を意味するかについては多くの見解があり、この規定の仕方によって現実に存在する組合の評価も変ってくる。著者達は労働組合の民主主義を決定する本質的な基準は組合の決定に影響を与え、役員を交代させ、政策を変更させることの出来る一般組合員の能力にかかっていると主張し、かかる視点より組合員の組合活動の関与――その型および度合――に検討を加えている。この場合、分析は単に組合集会への出席、役員選挙の投票等における一般組合員の行動そのものに止まらず、かかる行動に影響を与える組合の活動上・制度上の諸要素との関連が問題とされている。

次に取り上げられる問題は、労働組合は具体的には何を為すべきかという問題に関する組合員の見解である。著者達はこの問題を社会活動・地域活動・政治活動の各分野に分けて分析を行なっているが、特に政治活動については、アメリカの政治機構、団体交渉を中心とした経済活動、組合内部における指導者対一般組合員の関係等が重要な関連事項として取り上げられ、更に労働党(labor party)組織への可能性についても検討が行なわれている。

以上の面接調査の結果を中心とした分析は、組合それ自身をも含めた幾多の内的および外的要素が労働者の組合運動に対する見方および関与に直接又は間接に影響を与えていることを明らかにしているが、最後に著者達は一般組合員を次の七つの型に分類している。

(1) The ideological unionist
(2) The "good" union man
(3) The loyal but critical member
(4) The crisis activist
(5) The dually oriented member
(6) The card-carrier or indifferent member
(7) The unwilling unionist

勿論この類型化は最終的なものとして示されているのではなく、又或る類型に属すると見做された組合員の間でも、違った産業の異った組合に属する場合、その行動は置かれた環境に従って多様なものであることは認められている。ただこの類型化によって著者達の目指したものは、これをもって今日のアメリカ労働運動のある側面に光を当て、同時にその問題点を指摘しようということである。例えば、もし最初の二つの類型――この二類型に属する組合員は全体のうちのごくわずかな部分しか占めない――のみから役員が選ばれるとすれば、組合指導者と一般組合員との間にはギャップの生ずる恐れがあり、このことは一般組合員の組合活動(組合運動そのものではなく)の関与の度合を一般的に低下させ、ひいては組合運動内部の機能的かつ効果的な民主体制の発展を阻害することとなる。

今日のアメリカ労働運動が持つ具体的な問題としてあげられているのは、労働組合が労働関係において雇用者と非雇用者との関係において生じた問題を解決するために形成された依存的組織(dependent organization)であるということ、労働者の持つ個人的な社会的・経済的向上の希望、職業的及び企業的環境等々からもたらされるものであり、かかる問題を持つ労働運動にとって重要なことは、社会のうちで定着し強大化した組合運動が、如何に社会的価値としての民主主義を維持しつつ、一般組合員の組合運動に期待するものを実現していくかにあると主張している。

4

前にも述べたように、本書における具体的事実およびその分析の一般的妥当性については、更に一層の研究を待たねばならないが、少くとも以下述べる三つの点で、本書は高い学問的意義を持つものである。

第一にあげられるのは、従来比較的手をふれられなかった――或

は手をふれることの出来なかった――一般労働者を初めて組織的・体系的に取り上げ、科学的にもレベルの高い研究を行なったということである。S. Perlman によるアメリカ労働運動の研究において、その運動は〝職業意識〟に根ざしたものであると説明されている。(1) しかしかかる抱括的概念をもって、今日の複雑なアメリカの労働運動を表現することは、その具体的な問題点を指摘し将来の展望を得ることに対する助けとはならない。組合運動という全体的宇宙の中で、個々の組合員が如何なる価値観を持ち、如何なる思想を持っているか、そして組合運動に何を求めているかを知り、それが何故であるかを体系的に把握することは、何故その労働運動が今日の姿となり、未来に向って如何なる可能性を持っているかを知る必要条件である。本書における研究は、かかる条件を満たすための開拓的な企てと云うことができ、単にアメリカにおいてのみならず、我が国の研究者にとっても、深い意義を有するものである。

第二の点は、本書の持つ労働運動の国際比較研究における重要性である。従来の研究の多くが労働運動の制度的・思想的な面の国際比較を中心としたものであり、その説明として国民性又は歴史的・社会的な相違があげられたが、かかる説明が多くの場合、皮相的なものであったことは否定できない。このことは国際比較研究自体の欠陥というより、むしろ各国における密度の高い研究が不足していたことに起因するように思われる。例えば、同じ〝組合運動〟という言葉の持つ具体的内容は、その言葉が日本の労働者によって使われた場合とアメリカの労働者によって使われた場合とでは異るのである。かかる個々の概念の相違を無視しては、奥行きの深い国際比較研究が行い得ないのは当然である。本書における著者達の研究が、かかる個別的な概念の、具体的な理解をその中心問題の一つとしたことは、アメリカという社会に対する理解を深めると同時に、国際比較研究に関心をもつものにとって、多くの示唆を与えるものである。

最後の点はかかる質的研究における科学性の追求である。量的分析の場合と異なり、ともすれば主観的・局部的判断におちいり易い研究主題に関して、自己の持つ価値観およびそれに基づく判断の基準を明確にしつつ、資料の客観的な蒐集・処理を通じて、その質的分析を行ったその研究態度および方法は、単に労働運動の研究に止まらず、社会科学の分野における科学性の探求に、大きな貢献をなしたと云うことが出来よう。

(1) S. Perlman, "A Theory of the Labor Movement." (New York, 1949)

新刊紹介

ロジア・モーガン著

『一八六四年から一八七二年までのドイツ社会民主主義者と第一インターナショナル』

Roger Morgan; The German Social Democrats and the First International 1864-1872. (Cambridge, 1965, xiii+pp. 280)

昨年一八六四年は、第一インターナショナル結成一〇〇年にあたり、ソヴェート、イギリスをはじめ各国では、これを記念していろいろな催しがおこなわれた。そして第一インターナショナルにかんする研究文献が、ぞくぞく刊行されつつあることはまことに喜ばしい。ここに紹介するのも、そのひとつで、主としてイギリスを舞台として展開されたインターナショナルの運動が、ドイツの社会民主主義運動と労働運動とどのような関係にあったか、その競合、矛盾、そして対立の関係を明らかにしたものとして出色のものであり、注目すべき労作であるといえよう。つぎのような内容から成っている。

一、ドイツの社会主義政党――一八六四年から一八七二年まで。

二、ラッサールの党とインターナショナル――一八六四年から一八六五年まで。

三、ジョン・フィリップ・ベッカーとドイツにおけるインターナショナル――一八六八年まで。

四、ウィルヘルム・リープクネヒトとドイツにおけるインターナショナル。

五、転換点、一八六八年から一八六九年にかけてのドイツ労働会議。

六、アイゼナッハ党とインターナショナル――一八六九年から一八七二年まで。

七、結論――ドイツ社会民主労働党とインターナショナルの意義。

ドイツの労働運動は、それが小邦分裂の悲劇から脱出し、統一ドイツ実現を目指す民主主義運動と密接な関係を保ちながら前進しなければならなかったといういわば特殊性のために、しかも、ドイツのプロレタリアートは、イギリスの労働者階級とともに国際的社会主義運動の旗手としての使命を担わされていたために、ナショナリズムとインターナショナリズムとの矛盾に悩まなければならなかったのである。ラッサール（Ferdin and Lassalle）によってうけつがれたドイツ労働総同盟（Allgemeine Deutsche Arbeiterverein）は、マルクスとエンゲルスの指導をうけ、社会主義をとなえながらも、ビスマルクの国家主義の影響をうけたラッサールの思想を根幹として、協同工場への国家扶助と普通選挙権を要求し、マルクス主義の上に立つベーベル（August Bebel）とリープクネヒト（Wilhelm Liebknecht）の建設するところの「社会民主労働党」（Sozialdemokratische Arbeiterpertei）と競合関係にあった。

著者モーガンは、ドイツの社会主義運動を指導するラッサール＝シュウアイツァの路線とベーベル＝リープクネヒトの路線という二つの競合関係にたいして、インターナショナルの精神をドイツに鼓吹しようとする亡命者、カール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスと、スイスにおける亡命者、J・P・ベッカーとの努力を中心として論述をすすめているのであるが、その場合、両者ともインターナショナルの運動には比較的不熱心であったのは、ラッサール派にとっては、ビスマルクとの妥協、アイゼナッハ派の場合は、社会主義運動の勝利の前提として国内統一が必要であると考えられ、そのためにドイツ人民党との妥協の途を選ぶというように、インターナショナリズムにたいして、きわめて微妙な態